

## 学習意欲を高めるための指導と課題

### — 2年次後半に「スイッチ」を入れる指導の模索 —

「選り好みをしなければ大学に入れる」という入試環境の変化などが、生徒を学びに向かわせることが難しい環境を生んでいる。そうした状況の中で、どのようにすれば、生徒は自ら学びに向かうのか。生徒の学習意欲向上に取り組む3校の先生に、その実践と課題を聞いた。

**図1 学習指導要領改訂の基本的な考え方**

- ①改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
- ②「生きる力」という理念の共有
- ③基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ④思考力・判断力・表現力等の育成
- ⑤確かな学力を確立するために必要な時間の確保
- ⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ⑦豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

出典／2013年度全面実施学習指導要領総則

学習意欲が学力の一要素に

新課程（図1）では、学力の3要素を、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲、と位置付けている。これは学校教育法改正を踏まえたものであり、学習意欲が学力の一つとして定義付けられたことは、学校現場の指導を考える上で意義深い。

ベネッセ教育研究開発センターで実施した「第2回子ども生活実態調査」

学習意欲を持ちにくい社会、それを受ける高校現場の課題

**図2 学習への意欲(高校2年生)**

Q. どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う

とてもそう思う	18.5%
まあそう思う	33.2%
あまりそう思わない	35.7%
全くそう思わない	11.9%

出典／Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(調査時期：2009年、調査対象：全国の高校生6,319人(13校))

態基本調査」によると、「どうしてこんなことを勉強しなければならないのかと思う」という質問項目に対して、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した生徒は約50%にも上った(図2)。AO入試・推薦入試による入学者の増加により、大学入試が学習意欲を向上させる機会として機能しにくくなったことも、その要因と考えられる。

2012年度に全面实施される中学校の新課程では、授業時数の増加により学力向上が期待される一方で、生徒の学力が二極化することも懸念されている。学力格差を縮めるためにも、生徒の学習意欲の向上は今後も大きな課題である。

# 「学力」と「学ぶ目的」 学習意欲を支える両輪は

## 成績中位層の生徒の 学習意欲に課題

**編集部** 最近の生徒の学習意欲について、先生方はどのように感じていますか。

**藤岡** 真面目に勉強を頑張っている仲間に対して、素直にエールを



埼玉県立草加高校  
**藤岡 修** Fuijoka Osamu  
教職歴26年。同校に赴任して4年目。進路指導部。



千葉県・私立敬愛大学八日市場高校  
**石川和史** Ishikawa Kazufumi  
教職歴、同校赴任歴22年。進学指導部長。



東京都・私立成立学園中学・高校  
**矢管 隆** Yasuge Ryo  
教職歴、同校赴任歴14年。校務部長。

送れる生徒が増えているように感じます。09年度に担任を持ったクラスから、成績が学年で一番の生徒が出ました。その生徒が3学期の終業式の後で表彰された時、クラス全員が拍手をして頑張りをたたえていました。しかし、だからといって、それが多くの生徒の学習意欲の向上に結び付いているとは限りません。頑張っている友だちには素直にエールを送るけれども、「自分も頑張ろう」とはなかなか思わないようです。

本校の生徒は、中学時代の成績が中位から少し上だった層が中心です。ほどほどに勉強をして入学してきた生徒ですから、高校でも「それほどがむしゃらに勉強しなくても良い」という意識があるのでしょうか。

**石川** 本校も、受け身の生徒をどう学びに向かわせるかが大きな課題となっています。特に難しいのは、成績中位層への指導です。上位層は志望大合格を目標に比較的意欲が高く、勉強に励んでいます。また、下位層には本校では就職希望の生徒が多く、採用状況が厳しいために相当な危機感を抱いて高校生活を送っています。

ところが、中位層には上位層のような意欲はなく、かといって下位層のような危機感もありません。今やAO入試や推薦入試を利用すればどこかの大学に入学できるので、中位層の生徒は「無理して頑張らなくても良い」という気持ちになりやすいのだと思います。

**藤岡** 中位層の生徒が上を目指さうとしないのは、これまで勉強で達成感を得た経験が少ないことも大きな要因だと感じます。達成体験がある生徒なら、「自分はやればできる」という自信があるから頑張れます。ところが、中位層の生徒は、その自信が持てないために思い切った挑戦が出来ないのではないでしょうか。

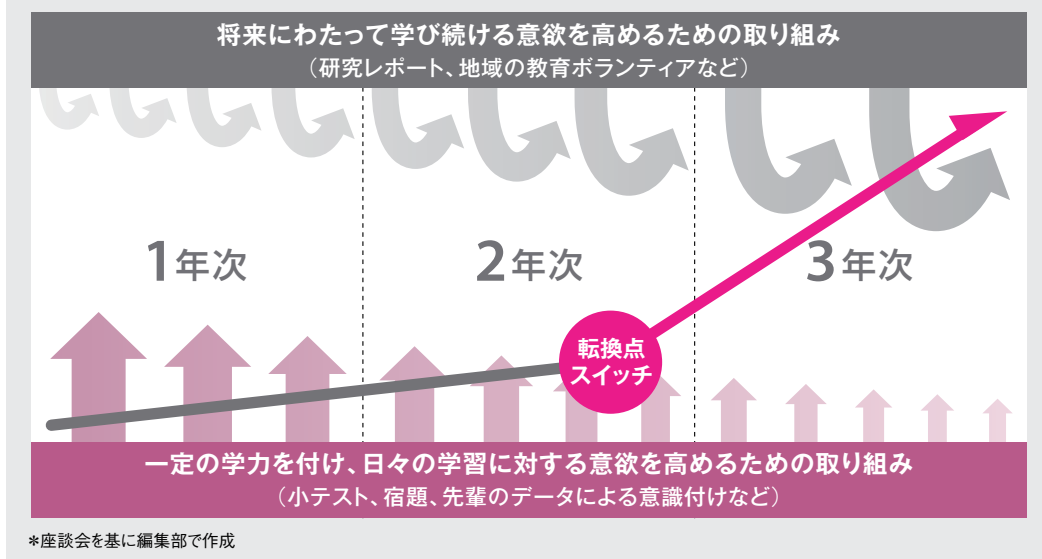
自校の先輩をモデルにして学ぶ意欲を引き出す

**編集部** 中学校まで受け身で過ごしてきた生徒に「高校生になったのだから、高い意欲を持って自発的に勉強しなさい」と言っても、実際には難しいように思います。生徒を学びに向かわせるためにどのような工夫をされていますか。

**矢管** 本校では、入学後しばらくは教師が過保護なまでに手を掛けています。入学式の翌日から小テストを行い、宿題も課します。1年生ではスモールステップを大切に、「学習の仕方」を学びながら学習習慣を身に付けます。鶏と卵の関係ではありませんが、「学力」と「意欲」を考え、まずは少しでも努力をしてもらいます。小さな成功体験を積み重ねることで自信を付け、学習意欲が高まり良い循環となることを目指しています。そして、学力に裏打ちされた自信と定着した学習習慣をベースに、2年生からは徐々に課題の量を減らしたり、宿題の提出日までの期間を長めに取ったりして、生

\*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

図3 学習意欲の向上とそのための方策



徒が自分で計画を立てて学習するような状態に仕向けていきます。このように指導の段階を踏みながら、最終的に生徒を自立した学

習者に育てるのが目標です。藤岡 確かに、中位層の生徒は放っておくといつまでたっても自分から学習するようにはなりません。そこで本校では、上位層と中・下位層が互いに刺激を与え合う関係をつくり、中・下位層の生徒の学習意欲を高められな

いかと考えています。具体的には、模試の成績上位30名を張り出していきます。2回、3回と続けるうちに、上位層の中から成績発表前に「この前の私の模試の結果はどうでしたか」と聞いてくる生徒が出てきました。

一方、中・下位層の生徒も頑張っている仲間を素直に「すごいね」と

認めているので、「勉強で分らないことがあったら、あの子に教えてもらおう」という雰囲気教室に出来上がりつつあります。成績の張り出しは、上位層と中・下位層、双方の生徒にとって意欲向上の効果があつたと思います。

石川 仲間に刺激を受けるという意味では、先輩の存在も大きいと思います。本校の特進コースは、土曜講座や放課後講座で学年の枠を取り払い、3学年全員を同じ教室で学ばせています。入試問題にも一緒に取り組ませますが、当然、3年生の方が高い点数を取ります。1、2年生はそれを見て「先輩はやっぱりすごい」と思い、触発されます。また、そうして共に

学習に取り組んできた3年生が志望校に合格する姿を見て、「自分もしつかりしなければ」という意識が高まっています。

自校の先輩の成功は、「自分も頑張れば、先輩のようにになれるかもしれない」と感じさせるモデルとして効果的なのです。

矢管 先輩の姿は、学習していく上での目安になります。本校で

は、卒業生に了解を得て、生徒の模試の成績を卒業生の成績と比較して公表しています。例えば、早稲田大志望の生徒に対しては、「昨年、早稲田大に合格した先輩の2年11月の模試の偏差値」が分かるようにしています。

先輩が2年生だった時の11月の模試の成績と、自分の同時期の模試の成績を比較させることで、生徒は「もっと頑張らなくては」「自分にも合格は夢ではない」という気持ちになっていきます。

### 大学で学ぶ目的を 生徒自身に見付けさせる

矢管 一定の学力と自信を付けさせたら、次に必要なのは学問自体の面白さや学ぶ目的を、生徒にどう考えさせるかということです。本校では09年度から『ナショナルジオグラフィック日本版』の教育実験校として、「総合的な学習の時間」で同誌を用いています。地球規模でのさまざまな現象を扱った写真や記事、DVDを用いたレポート作成や発表、同誌編集長

による講演会などを通じて、「幅広い教養」を身に付けるようにしています。ほかにも、地域の教育ボランティアに参加して中学生に勉強を教えるといったことにも取り組んでいます。そうした活動の中から、学ぶ喜びや目的をそれぞれの生徒に一つでも見付けてほしいと考えています。

日々の学習に対する意欲を高めるための取り組みと、将来にわたって学び続ける意欲を養うための取り組み。この二つをバランス良く行うことが大切だと思います。

**石川** 確かにそれは大切です。本校では「より良い進学」という言葉をよく使います。学力がないまま大学に進学しても、あるいは学ぶ目標がないまま進学しても、どちらも大学生活を有意義に過ごすことは出来ず、それは「より良い進学」とはいえません。

今の大学入試を巡る状況で、高校現場として困っていることの一つが、願書さえ出せば合格するようない、一定レベルの学力も要求されないAO入試があることです。こうした入試を生徒が安易に利用

してしまうと、高校で付けるべき学力が身に付かず、また大学で学ぶ目的も明確でないまま、高校を卒業させてしまうことになりま

す。また、高校で学習する動機を見いだせていませんから、特に2年後半以降の指導が非常に難しくなります。

そこで、本校では、「AO入試」というのは、本当にその大学で学びたい学問がある生徒のための制度なんだ」というメッセージを生徒に何度も伝えます。その上で、3年生になってAO入試での受験を希望する生徒には、徹底的に大学研究や学問研究のレポートを提出させます。「大学の教授を納得させるだけの志望動機と提出論文が書けるようになること」を出願条件としているので、何度も調べ直しをさせますし、書き直しも命じます。ですから、ハードルはかなり高いです。

すると、たとえ出願さえすれば合格できるようなAO入試であったとしても、受かった時に生徒はすごく喜ぶようになりません。頑張ってきたことが報われ、大学研

究や学問研究を通じて大学で学ぶ意欲も高まっているので、喜びもひとしおになるのだと思います。

### 基礎学力があつてこそ 目標に向かう挑戦が出来る

**藤岡** 本校で、生徒に卒業後の進路を本格的に意識させる指導が始まるのは、2年生の秋です。09年度は11月の修学旅行後に学年集会を開き、2年後半に向けて、受験生への切り替えの「スイッチ」をテーマに4人の教師が話をしまし

た。更に、予備校の先生による講演会、卒業生を招いた進路懇談会、進路学年集会、進路希望調査などをたたみかけるように行い、進路を意識させていきます。

一連の取り組みで重視しているのは「書くこと」です。進路懇談会終了後には感想を必ず書かせますし、進路希望調査でも志望理由については最後の行まで書くことを義務付けています。生徒は書くことによって、「自分はなぜその大学や学部を選ぶのか」「その大学で何がしたいのか」を真剣に考えるようになり、大学受験に向けての意欲と、大学で学ぶ意欲が深まっていくからです。

**矢管** つまり、大学に行く意味を考えさせる取り組みを何度も行い、生徒が自ら大学進学の目的を見いだせるようにすることが重要ということなんです。また、それらの指導を生徒の学習意欲に結び付けるためには、前提として基礎学力を付けておくことが不可欠です。一定の学力があつてこそ、生徒は自信を持って未来に向けての挑戦が出来るのです。

